

# 小泉 芑三 論

——『山西前線』を読む——

安 森 敏 隆

## (一)

歌人で近代短歌の研究の基礎を作った小泉芑三は、一八九四（明治27）年四月四日に神奈川県横浜市に生まれる。東洋大学専門部二科を卒業。立命館大学教授。北京師範大学教授を兼任し、後、関西学院大学教授となる。一九一三（大正2）年、第二次「車前草」、翌年「水薺」同人となる。一九二二（大正11）年、「ポトナム」を創刊する。一九三三（昭和8）年、「ポトナム」誌上に「現実的新抒情主義の短歌の提唱」を発表し、以降の指針とすると同時に、この理念が現代短歌を牽引する役割を果たした。一九五二年、「明治和歌史の研究」により文学博士の学位を受ける。

若くして小泉芑三に歌を作るきっかけを与えた石井直三郎は、処女歌集『夕潮』（水薺社 大正11年8月）について、「君のこれまでの苦しみが生んだ時の永遠性に対する憧憬の情念に萌す深い哀愁と、人生の孤独寂寥感からずるしみじみとした鬱懐とを基調とする世界である」（序文）と言い、「心の漂泊者」の歌であることを指摘している。石井が言うように出発期の小泉芑三の抒情は、哀愁と孤独と寂寥にあつた。続く『くさぶぢ』（立命館出版部 昭和8年4月）は、一九二二年以降の十年間の作品を集めたものである。この時期は京城（現、ソウル）、東京、新潟、東京、長野とあわただしく勤務校が変わる時であり、その折々の出来事をうたっている。第三歌集『山西前線』（従軍歌集）（立命館出版部 昭和15年5月）は、中国への従軍歌人

としての、麥三のヒューマニズムが各歌に見られる。戦争協力者としての歌という批判も受けたが、それをつきぬけたところの抒情の結実がある。麥三の場合、こうした歌作の傍らで、研究者としての『明治大正短歌資料大成』全三卷（明治歌論資料集成）昭和15年6月 立命館出版部、『明治大正歌書綜覧』昭和16年3月 立命館出版部、『明治大正短歌大年表』昭和17年4月 立命館出版部）を始めとする、近代短歌の研究者としての側面が核心にあることを強調しておかねばなるまい。

小泉麥三の業績は、おおよそ次の三点にしぼることができる。一つは、先にも述べた『明治大正短歌資料大成』全三卷にまとめられた近代短歌関係の資料の蒐集にある。「余の蒐集せる歌書は二千七百余冊、雑誌は一万二千余冊に達してゐる」（小泉麥三「序」と言うように、明治初期の短歌関係の歌集や歌書の基礎資料をくまなく集めることから研究が始まった。また「年表作成のために使用したカードは約四万枚に及び積み上げると略余の身長と同じ高さに達する。カード記入および整理のために、ポトナム短歌会同人諸君の涙ぐましき協力を得たことは、余の銘じて忘れることの出来ないところである」（同前）ともある。この、基礎資料が「白楊社文庫」として現在、立命

館大学の図書館に貴重本としてある。この三卷本の中でも特に第二卷目の『明治大正歌書綜覧』が圧巻である。これには、明治初期から大正末までの歌書、歌集がくまなく網羅され、それぞれ詳しく「解題」されている。さらにこれをもとに第三卷の『明治大正短歌大年表』が詳述され、これが今日の短歌年表の元になっているのである。

二つは、近代短歌史の基礎になった『近代短歌史 明治篇』（白楊社 昭和30年6月）という八百ページに及ぶ大著と近代短歌に関する論考である。特徴は、従前の短歌史観をふまえた上で明治の初めは和歌の時代であることを位置づけることから始め、近代短歌の特徴と和歌の違いを別抉しているところにある。先ず「和歌」の歴史を、巨視的に約二千年のパスベクティヴを置いて考えているところにある。祖形としての歌謡を母体として抒情そのものの歴史をみるという大きな歴史観がここにはある。その観点から見る限り明治の中期までは「和歌」的発想であり、それ以降を「短歌」の歴史としてみるという文学史観が成立したのである。「近代短歌の発生」を「明治二十六年」の「あさ香社」の落合直文に見、「和歌」と「短歌」の同一性と異質性を別抉したのとして貴重な近代短歌史観を提

示している。次に、日中戦争から太平洋戦争に突入する「昭和八年」のところで、「現実的新抒情主義」（ポトナムの主張）の主張を提起し、確立させたところにある。この考えかたの基本的構想が次のような「文学史における抒情詩の特性」として主張されている。

抒情詩の性質の第一は、他の文学と同じやうにその永遠性にある。それは感情情緒に訴へて人を感動せしめる力を持つてゐるからである。知識は永続するが情緒は瞬間に消え去る。知識は一度理解すれば永久に自己のものとなり終わるゆゑ再び習得することを要しない。（中略）抒情詩の第二の特質は個性的といふことである。抒情詩によつて表現される感情情緒はどこまでも作者の個性的感情情緒であり、作品からうけとる感情情緒もうけとる人の個性的感情情緒である。（中略）抒情詩の第三の特徵は普遍性と言ふことである。感情情緒は瞬間的であり個性的であるが、また同時に普遍的である。（中略）第四の特質たるその民族性乃至国民性をひきだすことができるであらう。人間の愛・悦び・悲しみ・慰さめ・恐れ・驚き・怒り等の基本的

情緒はひろく普遍性を持つものであるが、同種の民族にあつては、いはゆる民族性となつて特に一層明確な相似形をとつてあらわれる。（『近代短歌史 明治篇』）

短歌的抒情は「永遠性」を持つものでなければならぬことを主張し、知的なものの一回性と限界を言うと同時に、その本質はまことに「個性的」でなければならぬことを言い、さらにその「個」をつき進め徹底していくと「普遍性」を持つものになる、と主張するところにある。その上で「民族性乃至国民性」の上にたつ抒情詩を主張している。この考え方が、「現実的新抒情主義」の元になる考えであつた。これ以降に木俣修・渡辺順三・国崎望久太郎・上田三四二・篠弘・菱川善夫・佐佐木幸綱・上田博・三枝昂などの短歌史論が出てくるのである。三つ目の特徴は、歌人としての第一歌集『夕潮』、第二歌集『くさぶぢ』、そして従軍歌集といわれる『山西前線（さんしーぜんせん）』に収められた歌の数々である。

ここでは、一九三八（昭和12）年十二月に陸軍嘱託として北支・中支の戦線へ従軍歌人として出発し、翌年四月に帰国した間の歌を収めた『山西前線』の歌を取り上げていくこと

にする。

(一)

小泉芝三の『山西前線』は、渡辺直己の『渡辺直己歌集』(昭15年3月 呉アララギ会)と宮終二の『山西省』(昭24年4月 古径社)の評価の高い二つの戦争歌集の狭間にあって、評価の揺れてきた歌集である。『山西前線』を読むとは日本の昭和十年代の短歌を読むことであり、日中戦争から太平洋戦争にかけての「戦争」を読むことである。

『渡辺直己歌集』は、一九三七(昭和12)年七月、「アララギ」の会員であった渡辺直己が応召し、大陸に渡り、漢口攻略作戦などに参加した中で作ったものである。渡辺は、一九〇八(明治41)年六月四日、広島県呉市に生まれる。広島県立高等師範学校を卒業し、呉市立高等女学校教諭となる。一九三五(昭和10)年、土屋文明に師事し「アララギ」の会員になる。一九三七(昭和12)年七月、応召して大陸に渡り漢口攻略作戦などに参加し翌年の八月二十一日に河北省八里台で戦死する。その後、一九四〇(昭和15)年三月三十日、「呉アララギ会」から発行されたものである。一九三五年、三六年、三七年の応

召以前の作品も収められているが、それ以降の「応召集作」「山東戦線」「中支転戦」「再び北支戦線」の作品が中心をなしている。土屋文明に学んだ写生の冷静な(眼)が、戦場という極限状況にあつてもよく發揮されている。

貧しき兄が錢別に買ひ呉れしマグナ双眼鏡を我はつるせり  
どの兵もどの兵も石のごと硬ばれる表情をせり炎天の下に  
頑強なる抵抗をせし敵陣に泥にまみれしリーダーがありぬ  
手榴弾に殲れたる将校と兵二名が今朝も双眼鏡に明らかに  
見ゆ

泥の如兵は疲れて眠り居り月虧て寒き黄河河畔に

吾が正面を三十騎ばかりの敵騎兵が映画の如く北へ逃げゆ  
く

夜もすがら咳きぬし兵がその朝白蠟の如く死にて居りき  
血糊つきしガーゼいくつか棄てられし草原はいつか赤く素  
枯れぬ

苦しかりし戦の日偲びつつ春来る土に花の種を蒔く  
負傷せる匪賊の足が吾が入りし隣の部屋の入口に見えき

兄が饒別にくれた「マグナ双眼鏡」を戦場にあつても首に吊るし、炎天下にあつて「硬ばれる表情」をした兵士をとらえ、敵陣にある「泥にまみれしリーダー」や「手榴弾」を残らずうたいこんである。戦場にあつて生きてま向かう敵兵も、一旦、生命を失ひ死を迎えようとするときはや「敵」ではなくなる。

直己の冷静な（眼）は、その視点の高みから「敵」も「味方」も「黄河」をはじめとする自然もとらえてうたわれているところに、特立性がある。没後一年足らずの一九四〇（昭和15）年三月三〇日、仲間によつて六〇四首にまとめられて発行されたものである。本人の手によらず、死後に友人たちによつて編纂されたということも多少考慮に入れて読まねばなるまい。

また、宮柁二の『山西省』は、一九三九（昭和14）年、一九四〇年、一九四一年、一九四二年、一九四三年の日中戦争から第一次世界大戦までに中国の山西省を中心に転戦したものを、戦後の一九四八（昭和24）六月二〇日になつて刊行したものである。宮柁二自身「後記」で「主として中国北部大陸に、それも津波のやうな山脈の重畳にばかり戦つて来た無名の、それは歌人でもなく思想人でも無かつた一人の補充兵が、例へて言へば丁度、魚が水面に〇〇ふやうにして記した感慨の断片の蒐集

に過ぎない。当時に遡つて正直に告白すれば之は作品ではない。この一冊の作品はさうしたものに過ぎない」と言つてゐる。「之は作品ではない」と言つてゐるところに戦後においてこの作品群を発表した柁二の誠実と悔恨と孤独がにじみ出ている。

砲隊が道の曠に砂捲くを展望哨に敵て吾は立つ

岩稜に群がる鳥の鴉にて時おり木霊を呼びつつ啼けり

山上のトーチカの空青く清み吊せし鐘もありありと見ゆ

乏しき草踏みて止れり濁りたる黄河が見ゆる丘の上の端

咽喉より血をば喀きつつ戦ひて指しし黄河を光りつつ下る

古よ今に黄河が耕しし大民族をわれは憶はむ

ころぶして銃抱へたるわが影の黄河の岸の一人の兵の影

あかつきの暗き水際にひしめきて渡河序列の隊、馬整すこ

ゑ

軍衣袴も銃も剣も差上げて、暁渉る河の名を知らず

あかつきの風白みくる丘陵に命絶えゆく友を囲みたり

宮柁二の戦争体験は、痛切な体験といえども、一兵卒として「展望台」に立ち、「山上のトーチカ」や「黄河」をうたいなが

ら、はるかなる鳥や鴉の「木霊」に耳をすませ、喉から「血」をはき、「銃」をささげつつも敵兵の彼方の空を見ているような歌が多いことである。これは歌人としての独特の資質とともに、十年余たった時期になつて編纂されて刊行された歌集という性格から来ることにも注意しておかねばなるまい。

その点、小泉芝三の『山西前線』は、一九三八（昭和13）年十二月から一九三九（昭和14）年四月まで、陸軍囑託として北支・中支の戦線へ従軍歌人としてまわつた歌を帰国した翌年の五月に即座にまとめて出版されるというまことに貴重なものである。

## 序

本学教授小泉芝三君、さきに従軍歌人として、大陸に渡るや、単なる視察慰問をもつて足れりとせず、第一線に出て将兵諸子の苦勞を、身を以て経験した。真摯見るべきである。

あまつさへ、野戦病院に生還期し難き重病の身を横たふる試練にも遭遇した。その間の吟詠最も哀切至純にして心素かかるを覚ゆ。また、聞喜籠城等戦闘の實際を伝ふるもの、

皇軍の壮烈鬼神を哭かしむる底の精神歌つて余すところがない。

前線にあると銃後にあるとを問はず、広く世の人々に一読を希む次第である。

昭和十五年三月

立命館大学総長 中川小十郎

と、当時の立命館大学総長の中川小十郎に評価されながらも、初版の『山西前線（従軍歌集）』が出されたのみで、今日まで、先の二人の歌人の戦争詠に比べて評価の揺れてきた歌集である。それは、最後の次の五首が敗戦後になつて、不当な評価を受けて指弾されたからでもある。

つはものが生命いのち凜凛れる大陸の山河の上に月青く照る

大陸の野に山に生命過あや行ける兵を憶へばありがてなく  
現身うつしは滅びゆきつつ窮きつみなき大おほき生命のなかに生れ継ぐ  
死にゆるける兵の生命は永劫えいけつに大おほき亜細亜の血潮のなかに  
東亜の民族ここに闘いくさへりふたたびかかる戦いくさなからしめ

これらの歌は、戦線にあって「つはものが生命」、「生命過行ける兵」、「窮みなき大きな生命」、「死にゆける兵の生命」ということによつて究極の「生命」に思い至り、ひたすらに戦争の悲惨をうたい、敵味方の区別なく兵の生命を慰藉してうたったものであるが、一連五首の最後の「東亜の民族ここに闘へりふたたびかかる戦いからしめ」の歌をめぐつて、「本書最終歌は、所謂支那事変は、東亜に再び戦なからしむる聖戦であるとの意味をもつ一首である」（学内審査委員会）と断定されて、一九四六（昭和21）年の十月二十六日に「教職不適格」の決定を受け、奉職していた立命館大学を辞することになるのである。小泉芝三の『山西前線』の特異性と悲劇性は、敗戦後になって、七年前の従軍歌集の、巻末のこの一首が、現役の立命館大学の教授として「不適格」として裁かれ、葬られたところにある。

小泉芝三の学問の弟子であり、短歌の弟子である中国文学と文字学の泰斗・白川静は、この間の経緯とその決定の不当性について次のように言葉をつくして語っている。

小泉芝三先生が教職不適格の決定を受けられたのは、昭和二十一年十月二十六日であつた。その最も重要な理由と

して、学内の審査委員会は、昭和十三年十二月より三ヶ月にわたる、北支前線視察の間に作られた歌集「山西前線」をあげている。終戦より七年近くも遡る以前の作品である。審査当時の関係の人はいまほとんど没し、当時の事情を知る者は、おそらく私一人であらうとおもふ。（『小泉芝三全歌集』の「栞文」短歌新聞社 平成16年4月）

当時、小泉芝三によつて学問の薫陶を受けていた白川静は最後の語り部として次のように書き起こしている。さらに続いて問題になつた一首について、次のように言う。

決定書は、先生の「山西前線」の最終歌である

東亜の民族ここに闘へりふたたびかかる戦いからしめ

の一首をあげて、「所謂支那事変は、東亜に再び戦無からしむる聖戦であるとの意味を持つ一首である」と解し、中国を戦力的に無力化することを強調した一首とする。委員会の短歌解釈の能力がこの程度であつたことから考えると、かれらに短歌を以て教職の適否を判断する能力があつたと

は思われない。適格審査を通じて、当時教職にあつて歌を以て追放を受けた人は、他には全国に一人もない。この決定は全く希有のことという外にない。(中略)敗戦後まもなく教職者の適格審査が開始されたが、委員会は第三者機関ではなく、学内に設けられた。このような機関を学内に設置することが、そもそも非常識なことであつた。私の学校では、かつての禁衛隊長が、審査委員長に任命された。これが新しい体制による、民主化の第一歩であつた。自主的民主化の先峰であつた先生が標的とされることは、容易に推測されることであつた。そして若干の犠牲を出すことで、学校の全体が免責されるというような考えかたが、委員の間にあるようであつた。(同前)

適格審査を行つた「委員会」について、「委員会の短歌解釈の能力がこの程度であつたことから考えると、かれらに短歌を以て教職の適否を判断する能力があつたとは思われない」と語り、歌人として小泉芝三がただ一人やり玉に挙げられたことを述べている。そのうえで、これを決定した「委員会」が第三者委員会ではなく、内輪の戦後民主主義を推し進めようとした体制

側の恣意的なものであつたことに言及している。続いて、「再審査要求書」の草稿については、「私が書いた」と言い、国崎望久太郎・山元一郎・奥村三舟・和田周三・岡本彦一・土橋寛らと共に奔走したことを明かしたうえで、あいまいなまま「教職不適格」が適応されたことを更に次のように述べている。

再審査要求書の草稿は、私が書いた。そして国崎望久太郎・山元一郎・奥村三舟・和田周三・岡本彦一・土橋寛など、一七名の関係者が連署し、別に窪田空穂・頼田島一二郎の両氏の意見書、近畿歌人クラブ等の上申書、さらに賈鳳池等中国留学生らの上申書がそえられた。(中略)再審の結果は、たぶん良好であつたのだからと思う。「あらうと思う」というのは、実に久しい間、中央委員会からは、何の連絡もなかつたからである。そしてまた再審後に、他の機関からの介入があつたのかどうかも、不明である。一回の呼び出しもなく、一片の通知もなく、ほぼ一年も過ぎたころ、新聞紙上に不適格者の決定として、その氏名が掲げられていた。ただそれだけであつた。これが戦後民主主義の実態であつた。一切は今に至るまで、不明である。



(同前)

(三)

先般、『小泉芝三全歌集』（短歌新聞社 平成16年4月4日）が刊行され、私もその編集に携わり、「初版」のままに採録することが出来たので、まずは、『山西前線（従軍歌集）』から読み進めてみようと思う。小泉芝三の「歌人としての従軍の許可が内定」したことについては、「ポトナム」一九三八（昭和13）年の「十二月号」の「後記」（頼田島一二郎）で次のように書かれている。「始めはペン部隊に歌人の加はらざるを不当として、歌人協会と協力、板垣喜久子氏を煩はす積りであったが、協会で多方面よりの運動に奏功するばかりの情勢にあつたので、先生は別個に単独に「出願した」とあり、歌人として歌人協会（大日本歌人協会）と協力して指名を受けようとしていたことが分かる。ただ結果としては、歌人としては単独に出願し、許可されることになる。

全体のエピソードとも言うべき「北支篇」の歌が中川小十郎と板垣征四郎の「序」に続いて置かれている。

戈<sup>ほこ</sup>とりて兵つぎつきに出<sup>い</sup>て征<sup>せい</sup>けり  
おほけなきかなやペン取りて吾は

「戈」に対する「ペン」が、この歌集の最大のモチーフになる。昭和十三年八月、内閣情報部は、文学者との懇談会をもち、漢口攻略戦への文学者への従軍を要請した。同年九月、従軍作家陸軍班として、久米正雄を始め十四人を従軍作家海軍班として菊池寛を始め七人を漢口へ派遣し、同年十一月には、南支派遣従軍ペン部隊として長谷川伸等を派遣するのである。そうした動きの後を追つて歌人として初めて小泉芝三は、同年十二月、陸軍囑託となり、北支・中支の戦線へ赴くのである。「おほけなきかなやペン取りて吾は」と詠うとき、身の程をわきまえないと言ふ謙遜の意と共に、歌人として、唯一人ペンで勝負するといふ（私）の主張が顕現する。この「吾」である（私）がどこにむかつて収斂されていくかが、これから問題になるであろう。

一人征く（十二月十二日）

心ふかく願ひるたりし従軍を許されて我の出征<sup>いせつ</sup>かんとす

百万の兵戦へる大陸にペン取りて征くはわたくしならず  
 聖戦のさまをつぶさに歌ふべき大きき使命に思ひいたりぬ  
 征くことは私ならず祖国日本の起ちあがりたるさまをま  
 さめに

益良夫は爆弾を抱きて散りゆけり我はやペンを取りて死ぬ  
 べく

日本歴史を劃する大御軍に從行く吾の行方は知らず  
 再びは或はかへらぬ心構成りてしづけしこの明暮を  
 千載一遇といふことはあり紀元二千五百九十八年

『山西前線』冒頭の「一人征く」の八首である。ペン部隊と  
 しては、石川達三、林芙美子をはじめとして、作家たちを中心  
 に多く送り出されていたが、現役の歌人として初めて自分が  
 「一人」選ばれたという誇りと自負とある種の孤独がこの作品  
 の題に込められている。そして、この冒頭の作品に込められ、  
 ひいては『山西前線』一巻に込められたモチーフは「わたくし  
 ならず」である。「私であつて、私でない」という発想こそ、  
 歌人小泉芝三にたくされたものである。一言でいえば、〈私〉  
 的発想から、〈公〉的発想への転換といえなくもないが、「わた

くしならず」「わたくしならず」と繰り返しながら、「わたく  
 し」を「わたくしでないもうひとりのわたくし」に止揚してい  
 く過程に、この『山西前線』を貫くモチーフがあるはずである。  
 それは、大陸にいる「百万の兵」と同化することであり、「祖  
 国日本」と同化する事でもあつた。そして最も身近な肉親や、  
 友人知己にも同化することでもあつたのである。

別離（十二月二十二日）

〇〇の駅の埠頭に妻と手を握りて別る言葉はなしに  
 眼をやれば埠頭に立ちて肩掛けを振る姿見ゆ幻の如くに

死にてなほ悔ゆるなからむ覚悟をば人には言はず出征かむ  
 とす

極めたる覚悟揺るがぬみづからを恃む思ひは我のみにあら  
 ず

船艙に白布を引きして仕切りたる乏しき室にリュックを下ろ  
 す

〇〇上陸

事務室にともなはれ来し街中に櫛・フォーク・インク・羊  
 糞を買ふ

河豚料理を前に再び帰らざる思ひはつひに消さむすべなし

「別離」という題の五首である。日本を出発して、大陸におもむかんとする、別れの儀式の歌であるが、まず「妻」の歌が二首置かれていることに注目する。和歌(短歌)は、もともと相聞と挽歌(鎮魂)から成りたっていた。ともに「命」と「魂」の根源に回帰し、希求するところに五七五七七の韻律の特徴がある。恣意的か、意図的かは抜きにして、まことにプライベーターな(私)的な歌になっている。「死」を覚悟した別れを、こ

のように歌い始めるところに、戦時詠としての儀式歌的な別れの歌といえども、短歌の(私)的な可能性を秘めているように思われる。五首目の「船艙せなごうに白布を引き仕切りたると乏しき室むろにリュックを下ろす」の歌になると、下の句の「乏しき室むろにリュックを下ろす」のなかに、ただ一人になった菱三自身の孤高の姿がしっかりとらまえられて、うたわれている。

このあたりの〇〇の伏せ字が、少し歌の中や詞書きに出てきはじめるが、これは、全体を読む作業の中で確定していくことにしよう。〇〇の伏せ字が、共に、東京を発つたときの「埠頭の駅名」であり、渡洋する前の日本の「最前線の地」であり、

〇〇〇の大陸の「上陸したところの地名」の所にある。元々、こういうかたちの言論統制は、明治二十六年に交付された出版法を基底とする。「第十九條 安寧秩序を妨害し又は風俗を壊乱するものと認むる文書图画を出版したるときは内務大臣に於て其の刻版及印本を指押ふることを得」に、始まる 出版法の言論統制中の「安寧秩序を妨害」する、に相当すると思われる。さらに、この期の昭和十年代に於ける言論統制については、田中綾の『権力と抒情詩』(ながらみ書房)に詳しい。

#### 渡洋(十二月二十三日)

旗振りて見送る人もなき街にひそかに一人別れをつぐる  
わが船の後より来たりたちまちに追ひ過ぎてゆく軍艦ふねにま  
た遭ふ

舷側びんそくを掠めてゆきし海鳥らたちまち見えず烈しき水沫しぶきに  
南朝鮮みなんちやうせんの多島海に船の入りたればサンパチ島の灯台が見  
ゆ

黄海を進みゆく船の船室にわが読みてゐる東亜連盟論  
東より迫る暮色は見る見るに四隅に及びて船をつつめり  
支那海のただなかを行く船の上に三日月かかるマストに斜

に  
遼東半島の沖にかかりて降出でし雪は翼にかはりてやみぬ  
海のいろ黯く濁りて四方より押迫る波を切りつつすむ

黄に濁る海洋の上に散る波の虚空にひびくは音楽の如し  
女界灘にかかりし日より海荒れて船は進まずすでに幾日  
老鉄山高角右舷に過ぎ去りて漸く船の針路定まる

廟島列島左舷に見送り北を指す船をめぐりて鷗とびかふ

日本を離れてからの船の上での歌である。近代短歌が、獲得してきた、客観「写生」の一端がみごとにこの一連では使われている。この歌集の評価の一点も、いかに物や人物や思想が写生されているかにかかつてある。感情を、とことん抑止して、風景や、人物や、物によって語らせるやり方である。ある時は、〈眼〉のみをのこしてしつかり対照を把握して、対象物そのものに語らせるのである。

上陸（十二月二十七日）

〇〇〇の埠頭に船を横づけて積載貨物は夜の間に揚げんとす

乾杯の盞をおきて船長とわかれを惜しむ夜更けのサロン  
上海に九江に砲火くぐり来し船と思へばおろそかならず

〇〇丸

ぬ  
現地的一角にしてただならぬものうごめけりくらき埠頭に  
思はじとしてある我にひしひしと迫りくるもの恐怖にあらぬ

海の上の空凍みわたり星群は波にうつりて青くかがよふ

ついに、大陸に上陸したときの歌である。直感的につかまえた一言が「ただならぬもの」であった。上海、九江を通つてきた船を詠いながらも、「ただならぬものうごめけり」とうたう。その不気味な埠頭に立たんとする（わたし）を、「思はじとしてある我」として位置づける。〈私〉を無にし、国家に同一化しようとする志向であろうが、ここに個としての〈私〉の「恐怖」もあわせて顕現している。

続く「天津・北京・包頭」と題する一連には、次のような作品が年末の日々を追つてうたわれている。この年の昭和十三年度の小泉芝三の「従軍経路」は、「昭和十三年十二月十二日、陸軍省ノ事務ヲ囑託ス（陸軍省）」とあり、その直後の「十二

月二十二日 ○○港出發」し、「十二月二十八日 北支○○  
上陸」、「十二月二十九日 天津」「十二月三十一日 北京」と  
あわただしく出發したことが分かる。

秦皇島（十二月二十八日）

聞はふかき秦皇島の駅まへに病院列車横づけにあり  
大陸の空気つめたしひそまれる病院列車に暁の光さす  
○○より乗りし將校は命令をうくるすなはちたちて来しな  
り

山西に遠く行くべき將校に薬品類をわけて別れぬ

天津（十二月二十九日）

移動部隊ありてどよめく街中に租界警備の兵等去来す  
租界を警備する日本兵ありて厳然として通り行きたり  
万国橋の橋涯に並び厳かなり警備の兵等一一誰何す  
爆破せし南開女子中学に旗をかかげて兵等警備す  
爆破せし南開女子中学の校舎のなかに馬をつなげり

軍病院（十二月三十日）

駐屯軍病院に赴く。昨夜亡くなつた岩原敦軍曹（栃木  
県塩谷郡北高根沢村）の遺書を前に、岸岡大尉よりそ

の臨終の清々しさを聞く。遺書に「名も知らぬ花の散  
り行く春の暮」の句をしるす。河北省新郷の南方黄河  
に近い部落にての作である。

幾度幾度か死を覚悟せし戦闘を経て病にたふれぬ

若くして逝きし許嫁の傍に骨を埋めよといへりあはれに  
遺髪ひげの包に辞世を認めて覚悟のほどを明らかにせり

覚悟の清々すがくしかりしありさまを語らふ軍医ねもごろにあり  
同じくは戦死せしめたかりしと軍医は嘆かふ遺髪を前に  
砲弾の轟くもとに死にしにもなほ優りたりといへば瞑せよ

一場時市上等兵（群馬県中吾妻郡長野原町）は今年八  
月四日山西省横嶺関にて負傷、病院にあり。内地送還

を肯んぜず

送還をつひに肯んぜぬ若き兵動かぬ指を撫でつつは居り  
動かぬ指を動かと言ひ張れる言葉はむしろいさぎよきなり

廣瀬軍医大佐、欧州大戦に於けるフランスの状況を語  
る

負傷兵を再び戦線に帰すべく説き悩みたる國もあるなり

北京

紫禁城北海（十二月三十一日）

手たづさはり氷上に遊ぶ少女等の霞める姿夕日の中に  
アジアを死せるが如き無関心にながむる民等遊びあかなく

A氏寓居

北海の王宮の或る一室に良寛の書が飾られてあり

ただならぬ空気みなぎる街中にジギスカン鍋を友とわが  
食ふ

その後が続く作品について一言しておけば、「山西前線篇  
一」「山西前線篇 二」「中支篇」の作品と続き、最後に「従軍  
経路」が載せられ、次のようなところに小泉芝三の歌の本質が  
あつたように思われる。

死に向ふ生命いのちの前におぎろなく浮びて来たる無限光体むげんくわたい

この歌には「太原城壁東北角樓門に立ちて」（昭和一四年  
「二月三日」）とあり、戦線の先端部にある「死に向ふ生命」  
を思いやり、見える世界と見えない世界をアマルガムさせたと  
ころに「無限光体」を現出させている。

塹壕に最後までありて死行し娘ぢやうしやくん子軍の死体まだ暖かに  
曳光弾に瞬間光るメスの先の尖り鋭く血潮に染めり  
地の涯の戦線にして妻のもと金届けたしと兵の言ひ出づ

戦線にあつて、情報の収集にあたつていたとはいへ、ここ  
には芝三の、短歌という形式をもつてしてはじめて捉え得る  
ことのできた独自の世界とヒューマニティーに貫かれた精神  
がある。この歌は「娘子軍」とあり、一九三九（昭和14）年の  
「一月十七日」の作である。十八、九歳の「娘子軍」の暖か  
い死体や捕虜の「いのち」を見つめ、自己の手術の瞬間にた  
まゆら光る「メスの先」に付着した血潮をうたい、故国の妻  
へ送金を言う一兵卒の家族への愛とあわれを捉えてうたつて  
いる。

四川の兵涙ながして戦ひしあとあはれなり麦生青める

この歌は、「風陵渡行」と題する同年「二月一日」の中国  
軍の塹壕の後を見ての作である。この一首に潜むヒューマニズ  
ムは四川の兵の「涙」が芝三の「あはれ」とかさなり通底する

ところに、柔軟な抒情とヒューマニズム精神が結晶して、まさに「現実的新抒情主義」の実践があると思われる。

第三歌集『山西前線』は、最後の「東亜の民族ここに闘へり

ふたたびはかかる戦争なからしめ」の解釈をめぐって批判も受けたが、琴三の人間性豊かなヒューマニズムはそれをつきぬけたところにあった。